

論其魚ヲ喰ひ候もの或らず死申候段御吟味に相成。前茶之段御仰せ付られ候事

嘉永六年十月上旬写

右の書面に記載した金品、其他の財産は、全部藩に没収されたことは勿論、藩に貸してあった巨万の金銀もすべて捧引きということになり、所人も哀れであるが、それ以上に同情すべきは、切腹を命ぜられた、藤原主殿以下十一名の、重臣や家臣の人々である。

この人達の中には、勤後中、時に音物や期<sup>わか</sup>敷<sup>み</sup>などを受取ったものもいるかも知れぬが、事実は藩の都合によつて、陰に錢屋の密貿易を容易にするように、便宜を与えたことと、時の事情によつて、殊更に咎められ切腹して藩の難句を緩和したのではないだろうか。そのような別は、他にも往々あつたように思う。

又、五兵衛が、ある夜入江の海に毒を流して、魚如人を沢山死なしたということが、事実であつたかどうか。直ちに信じ難いことではあるまいか。

(付記)

錢屋五兵衛は加賀國宮越浦(今の金石町)の船豪商。

篤業と号し詩と俳句を能くした。屋号は清水屋。西替と営業したから世人鐵屋という。

機智に富み膽略あり。加賀藩の用達となり、多くの船舶をもつて通商を営み巨利を博す。

嘉永五年(一八五二)河北湖埋立工事をして愚民の怨を買い、投獄せられて病死す。年八十。(新撰出辞花)

(この項終り)

旅行記

六十路の旅

(一) 苔寺から「伊豆の踊子」へ

本公会員 富 沃 泰  
河野清史談会会長

今度の旅は、思いきり羽を伸ばしてみようと思つた。四男四女が育ち、結婚し、ハ番目の末の子すら、人の親にならうとしている。言わば「親」から「じい、ばあ」への脱皮でもある。しかし今の私には、その「ばあ」もなけれど、五才の孫娘を同伴することにした。

五月二十日午後八時、佐伯駅から日南三号の客とは女子、廿一日の朝は京都駅に子供たちを迎えられた。京都よりの大夜高槻は、且つるキリシタン大名高山右近の城下町、その高槻の娘の内に落着き、田舎の香り高いふつ餅(よもぎ餅)をとり囲む。大津・大夜の組も集つたので、三組十一名の子も孫は大乗おいである。しばらくして、私はその中を抜けて、一人で苔寺に向かつた。

苔寺は、洛西の名院西芳寺。この寺は寺歴より千度で有名である。阪急電車嵐山線の上桂駅から僅かイ陸離である。私はこれで三度の訪れ、この禅院に入る橋の手前におる庄の神の大水が、五月の昼の日照りに広い陰をつくり、汗は私を迎えてくれた。山門から左右の楓林の参拜道は、もう既に苔の鬱塞である。目蓮式の池泉、松、雑木、竹林を混えて、福の交叉した林、丘の上の石組寺、樹林の下に百餘種に及ぶという数多い苔の種類の色が交錯は、幽玄という以外言葉を知らない。杖、私の筆をも

つては、六百年前、豊感画師の手によつて作られたこの文化遺産への冒瀆ともなる。一周して裏門にまわる。そこに大きな託念碑がある。これだけは書き留めておいた。

苔寺にて

お互いの祖先の日本人が、その時に築き上げて遺したものを、今の若い人がどんな風に見ているのか。尋ねてみたいことである。亡びたものをただ美的な興味で眺めているのか、それともこう乱雑になつた世の中にも、自分たちの生活や、血のつながりがあるものとして、なつかしみ、受けようとする心が残っているのか確かめたい。

大佛次郎作「帰郷」 過去の章より

川端康成書

私は苔寺を後に、津で嵐山の渡月橋畔に出る。橋を境にして下は桂川となり更に渡川とながかり、上は保津川と呼び丹波路に源を發する。

舟溜りの宿に出かけ、一人身の気軽さ、早速船を出して貰つて、千鳥が淵を遊航する。棹とさす船頭さんは、  
齡七十に近しい。

渡月橋を行き交う車は近くにありながらも、嵐山の新緑と、満々とたたえた淵の深さは、一切を呑んで寂として、頻りに鶯の音が美しい。

その昔、瀬口入道と慕つてこの淵に恋の身を沈めた、美女横笛の哀史と、老船頭は訥々と語る。私はさうして岸天龍川に舟をもやつて貰う。

下りたところの茶亭の奥の、仄つそりとした水蔭に、小督の孫の小さな塚がある。畑野浦福泉寺の先住に伴われて嵯峨野歩きの間、この塚を訪れたのは四十数年前のこと。多感な私の青春の一日で居たが、  
木立の繁みの下は日の暗い。誰か手向けたのか、香煙がゆらいでいる。

源平興亡の中、これも一つの女性哀史。高倉帝への思慕を胸に秘めながらも、平清盛の息女という立場が板ばさみは、嵯峨野の奥に遁れ、想夫恋の曲を弾く小督。七十余年の歳月は流れているが、嵐山の峯の松籟は、人の世の流転を憂で続けていっているのである。  
清盛に縁ふかい祇王祇女由縁の祇王寺もこの近くにあり。

二十二日十時、新幹線に乗り、京都駅発東京へ。高槻の次女が加わり同行三人。五才の孫は、車中の物売りとして窓からの富士山だけが興味であった。ところがその富士山は今日は曇りで駄目である。

この孫のため、東京にいった私は、迎えの三男の親子三人の案内で、まず上野の動物園へ行く。そこには中国からの特使パンダちゃんがいる。だがそのパンダちゃんは今後は休養、週に二回の休みと、別に今後の休みの日がある。人間より先に、ここでは週給二日制があった。孫にとつては全くついていない日であった。

二十三日、朝小雨。宮城前桔梗門に集まる。皇居拝観と許されたもの、全国から上京した二百余名が参集した。

宮内庁の係官の案内で約一時間あまり、皇居内の拝観をしたわけであるが、こまごまと書いたら長くなるので、ここでは省いて、専ら歴史的な追求とすることにしよう。

今から凡そ五百年ほど前、木曾道灌がここに江戸城をここに築いたのは、彼が関東管領かんとうくわんりやう、上杉氏うえすぎのうぢの執行しやうぎやうとして、武蔵の国一帯とその周辺を管理したのであった。しかしその当時の城は、現在の千代田城に比すべくもなく、

おがいは松原つづき海ちかく  
富士の高嶺を 軒端にぞ見る

という状況のものであったという。

江戸城の名の因るところは、木曾道灌より更に遡ること二百五十年、この地方の豪族江戸四郎が十二世紀ごろ居城とした。その江戸氏の姓が城の呼ぶ名となつたという。この城には天守閣はない。明暦の大火に類焼し、現存する三層の富士見櫓を代行した。

城壁の巨石は、定紋の刻まれているものが多し。城石も色々異なるものが多い。これは徳川氏の拠城として構築された際、諸国の大名に命じて、競って献納させ、その大名の紋所を刻んだものだろうと説明された。ここにも日光乗照宮造常、奉勤交代等と一連相通する諸大名の出資による、経済圧迫の一つの手段としての足跡がある。

江戸氏滅び、道灌住むこと三十年にして暗殺され、徳川封建三百年の歴史も潰えたが、今この眼で見る兩上りの千代田の森は一層美しい。処々に残る城門、櫓、深い濠、古い芝生、手入れの届いた庭園の樹々。古い伝統を保存する中にある近代建築との調和美、深層趣きは海であり、丸の内界限は葦原であつたといふこととはとても考へられない。今、東御苑と称する、宮城内約七万坪は都民に解放されている。東京に遊ばず、ここには是非足を運ぶたいものである。

午後八時、明治神宮へ。午後三時、新宿から中央線に乗り三十分で三鷹駅につく。車を拾つて深大寺といふ寺に向かう。

この寺と、平林寺といふ寺は一度は訪れたいと、かねてから思つていた。それは、東京近在の寺の中で、昔の武蔵野の面影を残す古い寺であるといわれ、それにふさわしい文化財もあるときいていたからである。

三鷹の駅から三十分でこの寺につく。註にたがわず森は深く、附近の所中する所の暗い密林である。武蔵野特有の樹林が多い。門前所も田舎びて、何か魂のふる里に帰つたように感ぜられる。

旅の昼の食べ物、ソバ一本のこの私の恋する深大寺ソバの店を左右に見て先づ参詣。天平の昔創建されたといふが、幾度かの大火にばかり、桃山期という山門をくぐり、本堂は後代のものとみだが、寺内のすべてが草深ささへ入感させられる。左程大きい寺ではないが、京都の寺を見た眼では勝手がちがうが、寺内の秘仏には白鳳期のものがあるといふ。それ日それとして、私は門前のソバ屋に引き返す。

私は前にも書いたがソバが好きである。それだけに名物と名のつくソバはのがさない。しかしいさこも似たりよつたり、それはそれが正しいかも知れない。土の味、素材な味がソバの命である。そう大きく変わる筈はない。古い時代、武蔵野の野の中で水利の悪いはずのこの地帯は、畑作が主体であり、ソバが作られ、この寺に関東一帯から参詣した人々の腹を満たすには絶好の食べものであつたに違いない。それがいつの間にか口伝に「深大寺ソバ」といふ名前が広まつたのである。

木浅れ日の木立の奥の深大寺そば打つ翁と  
語らうもよし

その老翁は、お寺の境内から湧く水は、豊かです、良い水です」と話を添えてくれた。徳富蘆花の「ふみざかたね」との作品のふる里も、この辺り一帯の武蔵野生

活の所産だと調べていたが、——日は既に暮れはてた。私日西武所沢線の三男の家に、バスを乗りこいで急いだ。

世四日、今日は伊豆の旅である。同行は高観の娘、天候は快晴。

八時の出発は朝のラッシュ。それは覚悟していたものの、都心へ都心への、通勤者同志の交通戦争は、田舎者の私にはたまつたものでない。それでも青年期何年かを東京の街で暮しただけ、高田の馬場は四十七士の安齋を思い、斎宿から中央線のお茶の水を通過すれば、関東大震災の後のニコライ堂の廢墟が追憶された。

伊豆は熱海で東海道線と別れる。東京から伊東まで伊東線、それから伊豆急電車となり、下田が終点で、熱海からバス便も多い。

私はこの旅は、文脈・観光もさることながら、本職のみかん視察が主体となっている。それだけに中心をこれにおき、他は時間の許すかぎり、超スピードで伊東を経た、下田までの南下を計画したのである。

先ず熱海まで電車にしてここで下車、ここでは温泉は「われに別府あり」で意に介しないことにして、熱海の海岸を親子で散歩する。「お宮の松」は遠くない。貫一はお宮を恨み、お宮は心になく結婚をしてわが身を悲しんだ。従つて「お宮の松」は目出度い松ではない。心なしか萎んで見えた。それと道理、排気がスという現世の苦悩が仄いせいもある。紅葉山人も罪な人だ。お宮の松で話しかけられた運転者が気に入って、そのタクシーで伊東へ。

親切で客引き上手なこの人は、自殺日本一という名譽(?)ある「錦が刺」という脇道に立寄つて、その絶壁を

のぞかせて呉れた。

駿河湾に面した西伊豆は知らないが、相模湾よりの東伊豆一帯は、急峻な山が海にせまり、断崖が多く、入江となつた湾は漁港であり、また大小の温泉の町となっている。大村は、富士火山系であり、箱根火山・天城火山はその中に入り、古来有名な温泉が伊豆半島一帯に極めて多い。伊東市にはいるまでの海岸線の変化、その景観は省略する。

伊東の西、歴史は古い。藤原期に伊豆の押領使となつた藤原一門が伊東庄に住み、伊東氏と称した。平安末期鎌倉初期、伊東祐親の娘八重姫と、伊豆に引流された源頼朝のロマンズは名高い。尚、曾我五郎、十郎の父の仇、工藤祐経も、兄弟の父河津祐泰も伊東一門である。昼(昼食)をとつて娘と町を歩く。娘は「蒲江の町の香がする」という。私も同様である。人口五万、伊豆きつての温泉と観光の町だが、それに加えて昔も今も、漁業が基幹産業であるという事は間違いない。それが町の体臭ともなつてゐるのである。大島への航路もここからある。

折りよく下田行ききの伊豆急、電車が降り、目的の地稲取へ急ぐ。沿線の急傾斜の山肌には、みかん畑が広くひろがりを見せる。

四十五分で稲取駅に急行は停車する。駅からすぐ山上の、静岡県柑橘試験場分場が訪れる目的の地である。事前に連絡してあつただけに、手際よく見学の便を計つて頂いて、約一時間半の少時間だったが、九州の果てからここを訪れた甲斐があつた。佐伯地方には極めて少ない品種だが、日向夏、ニューサンマートオレンジの新品種の研究である。海岸から標高一五〇米余とみられる場所には、極めてスマートな近代建築。しかも眺望は絶佳。

私さまつ間の娘は、この場が極めて気に入つたらしく、  
ちつとも退屈してない様子。ここからは大島が海の彼方  
へ一目、少しはなれて小島と、伊豆の島々がよく見える  
が、御神火は見えない。波浮の港も何処かわからない。  
でも歌好きの娘はキツト、野口雨情の「波浮の港」を口  
ずさんで、初めて伊豆の風光を賞でていたにちがいない。  
呼んで、もらつた車に乗って、試験場の門を出る。

日向夏 新しきありと伊豆の山尋ぬる道也  
大島の見ゆ

隣りの町は河津、前に書いた菅我兄弟にゆかりのある  
地とおぼゆる。所を貫流する河津川にそつて行けば、天  
城峠を越えりと修善寺へ出る。

この道を逆に、修善寺から天城を越え、河津川べりの  
湯ヶ野に宿り、下田に下つて行つた若き一高の学生、川  
端康成が後年迎女作として世に出た「伊豆の踊子」の旅  
路である。

夏みかんが黄色に実つておる中に、今年の花は咲きか  
おつてゐる。その河津の望の湯ヶ野は車では一走り。運  
転者は「ここが湯ヶ野の、福田屋への道です」と、車を  
脇道へ止めた。娘と二人して小さくなる坂道を少し下  
ると、河津川が天城峠の水を集めて、水の流れは早く豊  
かである。

小さな橋を渡ると、橋畔に古の宿屋がある。これが福  
田屋である。二階建ての小さく整つた構え、玄関前の庭  
にある「踊子」の、等身大よりやや小さい石彫の人形が  
可憐である。室内にも窓越しに、同形のコケシが土産物  
としてある。

宿の右手の空地に、自然石の文字碑が残されている。

川端先生は既にこの世にない。ノーベル賞の偉大な文学  
の足跡の中の一つである「伊豆の踊子」だが、甘い哀歎

と、旅情にみちたこの作品は、日本の今までの若者に与  
えたように、今からの若者にも青春の夢を残して行くで  
ある。夜は河渡の声で美しいだるう此の宿に、一夜の  
いこいそと心を残しながら、再び川にそつて下つた。

夕クシーは一陸下田へ。南へ行く程伊豆の海は、限り  
なく美しく靉しい。海岸は変化になじんでゐる佐伯人の  
私も、今さらの如く途日楽しいものであつた。点在する  
出で湯の所、漁業の港、又かん畑など、その交錯する窓  
外の風物は、時の去り逝くのが惜しい。

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海也

沖の小島に 波の寄る見ゆ

大海の磯もとどろに寄する波

われで砕けてさけて散るかも

深、実朝の歌である。万葉調のこの歌の格調は、伊豆を  
歌いつくしているといえよう。彼も伊豆を愛した人であ  
ると言えよう。

下田に着いたのは既に四時近くつた。親娘は旅足と  
早めた。この所も伊東と同じく、温泉と観光漁業の所  
である。然し一つ大きく違う。

伊東は古い日本の歴史の中で光り、下田は近代日本史  
の黎明期の中で光っている。

安政元年（一八五四年）、黒船来航に三百年の鎖国の夢が  
破られ、提督ペリーと幕府との間に、湖濱の下田條約が  
結ばれたのが了仙寺。

こゝで安政四年、総領事ハリスと下田奉行井上清直と  
の間に、更に下田條約が重ぬられた。吉田松陰米國密航  
許画の果せなかつたのも此の地。幕閣は動揺し世は安政  
の大赦となる。ハリスと条約を結んだのは玉泉寺。

この玉泉寺に、唐人お吉の墓がある。大きく疾駆する  
世相の齒車の中に巻きこまれた、相愛の鶴松との悲恋の

物語り、ラジヤメンお吉とさげすまれた悲運の末路は、ついに投身自殺によつて流転の一生を自ら断つた。劇に腐乱した体は恐れられまつる人かないのを、玉泉寺の和尚が憐れをかけて葬つたと伝えられている。

今は女優水谷小重子によつて、愛人鶴松の墓と並んで立派な比翼塚となっている。下田を訪れる人の多くはお吉の墓前に足を止めている。玉泉寺の地下の先住は、この繁盛ぶりに、極楽で微笑しているにちがいない。

「踊り子」の一行は大島へ。その大島へはここから船は通う。踊り子は居なくて、私たちが送る人は誰もない。

南伊豆の入り陽は、美しく下田の港に映える。私は娘を促して、東京への直行便の時間を気にしながら、駅へ急いだ。

(この頃終り)

(片断) 筆者 富沢氏の去る五月の上京は、柳野博士伊勢水神社の社殿復興・建築等多年に亘る功績がもとめられ、東京の神社本庁での表彰式の参列のためで、この旅行記はその栄光にかかちいてのものでありました。(編集者)

〔正誤・記入を乞う〕—次のページから六ページにわたり—

▲まず、ページを (89-27) から (89-38) までは六ページづけて下さい。その

▲三ページ 下段 日付は、五月はあ、く、の雨のちりたあけて、六月二十四日、

▲三ページ 深島地回は、前所役場の資料と写したもので、

▲三ページ 新し、新しい救止(突堤)を、下図(A)のように書いて、

▲三ページ おかしな女と思つて、行つて見たと、(B)の

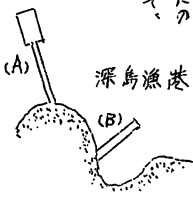
▲三ページ 出まて、いきました。現地をたしかめること、

▲三ページ 大事に思ひました。

▲三ページ 下段 終りの方 清水氏は、前所長、

▲三ページ 現校長井上氏は、前校長、現在校長は、落合求氏です。

▲三ページ 上段終りから二行目 下小学校分校、原本のおままり、分校を閉す。



探訪記

深島を訪ねて

(羽柴記)

昭和四十八年六月二十四日

時 参加者・三十六名(写真連盟の方々と合流)

それは蒲江町の教育委員会の方々の幹旋御援助と、深島の前所長清水氏の御案内によつての成功であった。まずこのことと、声を大にして申し上げたい。

天候も幸いであつた。恵まれた一日であつた。そんな口々に、よかつた、満足したと喜んで帰つた。深島から帰りの船では風波がはげしく、だいが波をかぶつたが、名にし負う深島である、ホンのちよつびり、おみかげに見せてくれた深島の波、そう思いたい。

深島は景勝の地ではない。すばらしい自然景観はないでもないが、それはすべてきびしい現実である。観光断では深島の開発とうたつてはいるが、深島のきびしい自然条件はそのことを、かなり拒みへづけるであらう。

藩政時代から、この島の開発にはかなりの努力とつづけてきている。そして、つづつと失敗をくりかえしている。なぜであるか。それは土地は可耕地を広くとつてはいるが、所心の水が少ないことと、汐風がはげしいことである。水はパイプを海底に沈めて敷いて、陸地からパイプを引くことは出来ず、望みは、望みは、波がはげしいことが決定的である。これが人々の往き来を妨げ、物資の移送に困難をきたす。

深島にも蒲江や丸市尾などと同じように電力線が引かれない。電話も公衆電話ただ一個ではあるが、ともかくも出来ている。「そう、急患」という時、医者は呼べるが、

(三十三ページへ)

(二十六ページより)

さて、跡原カバンと持ってすぐ来てくれるかどうか。海が荒れていては、どうにもなるまい。勿論、いま僅か十九戸の深島に未仕する匠者もいます。困った島である。

佐伯言葉に「ず、ねえ。」(祈りか、落度かあるといわれる)というのがある。まことに深島は「ず、へ」というにふさわしいような島である。しかし望みなきにあらず。清水氏のように進取、積極的な意欲をもたして、まず深島の立地条件に即して、島の周辺を漁場を徹底的に開発し、豊富な水産資源を利用する。港灣岸壁を改修して大型の船を繋げるようにする。宅地をひらき、道路を通じ、林野を開発して、深島の気象条件に即した、獲得の農耕、園芸、果樹などで、野産、その加工と、創意工夫の余地があるのではあるまいか。

これはしかし観念的、一般論的で、皮相な見解であるとお叱りとうけるかも知れない。

豊後水道の入り口にある孤島、それはしかし、日豊海岸国定公園(予定)の重要なポイントの位置にある。

かつては、赤土村の農産物、佐伯藩の流罪者が苦勞した島。明治以来は、大規模の基地として賑わった深島。今日観光開発の方面から注目されているが、やはりこれをどうまく海、その海の資源をどうに生かして、これまでの歴史的な数々の経緯にまとい、今日の特長の中で、孤島深島が舞臺に登場する、その意図が用意されたようになっている。その意図についてある。

屋形島をすくって見た深島のはるか遠く、大きく見えた島の印、島の中あちこちの記憶、いつまでも同行三十数人のものの秘裏に残るであろう。(つ)

史談会の動き

(五、六月)

五月十一日(土曜)

午後、手近かみ跡原、木立から松浦へ行く。峠を越える。大野の溜池の絶景が印象的。峠路は、高木、清田、深矢、羽柴の四人。峠路は、大野の遺骨でふさがり、古よと道にまよう。老鷹をひねりとし、野馬の音かしまりと耳に入った。

松浦に下りて、バスの時間があつたので、河津の吉原寺まで足をのびし、大鶴頼治氏を訪ねて、お茶とおはれ、書画を拝見したり、心あたたまつた思いで、午後五時のバスで帰った。

五月二十五日(日曜)

深島へ行くところ、雨のため中止。

六月三日(日曜)

大分県地方研究会の総会、講演があつたので、本会から岩田、深矢、小野、高木、五十川、古藤田の六名出席。

六月二十二日(土曜)

文化会館で「日中のカラクリ展」がある。後援した史談会は、二百枚ほどの入場券を扱った。面白い催しであつた。

六月二十四日(日曜)

今度、快晴。参加者は三十七名、青山の黒沢の方々数人、豊高生、佐伯市長連盟の方々、婦人連の参加も多し、実に楽しかった。

蒲江所教の方々のお世話、富沢会員の奔走で、地元清水橋一氏のご案内がいただけ

たこと、この日の行事をもちあげてくれた。常連は予定を変えて、王子神社―墓地―東光寺とまわつて、四時のバスで帰った。

六月二十九日(金曜)

宮崎県総合博物館の沢武人氏来り、終日山中氏の御意をうけて、史料寄贈資料「家老日記」により題される。尚野氏解放による「日向藩土史料集」外数冊の補土資料を購入した。重たい本を御持参下さつた。おが史談会に寄せられる御厚意を感謝したい。

六月三十日(土曜)

宇田町大原の鶴野尾神社に、佐伯惟治にゆかりがあるので、見たいかと思われる甲冑が出土している。誘い合せて午後出かけた。宇和宮史館の中村氏もお出でに有つた。宮崎宮司及び中村氏のお話をきき、くわしく頼る。古びた鎧ひつの中、威嚇がたつていた。ところが、それは御大將の吾す甲冑でなく、武將の着る具足(かそく)、それに鎧通し、本権方(柄)が三本継に有つている。鉄騎など、そんなで、室町時代のものと推定、宮崎県で入手したものの、千原の宮殿某氏が鶴野神社に奉納したらしいことがわかつた。

昨日の沢氏も見えろれていて、私共は時間があつたので、鶴野尾神社に土祭舞、庵やら二三軒を歩いて、暑い日差しにいきさか寂れてバスで帰路についた。

お知らせ

古文書読解講習会(県立図書館主催)

八月廿七日、八日、九日の三日間

午前九時から午後四時まで  
予申し込み、郷土史料借用、本会より  
三人分申し込む(申し込み納入)  
希望者は羽柴まで申越し下さい。  
(交通費、汽車賃、弁当費、資料費)